主語（しゅご）

shu-go

subject = 主語。叙述構文の主要成分。名詞・代名詞が中核となる。

topic = 題目語。題説構文の主要成分。名詞・代名詞が中核となる。

nominative case = 主格。動作主・状態主を示す補足部。

叙述構文の補足部の一つ。述語と対応し，述語の表す動作・作用・存在の主体，あるいは性質・状態・関係などの帰属する主体を表す成分。

a 風が　吹く。（動詞文）　b 風が　涼しい。（形容詞文）　c 風が　爽やかだ。（形容動詞文）　d 風が　ある。（存在詞文）

a～dの「風が」を「主語」という。「主語」は，一般に，体言および体言相当句に格助詞「が」が付いた形で表される。

「主語」と近接した概念に「主格」と「題目語」（題目部）とがある。「主格」は体言と用言の意味的関係を類型化したものの一種，「風が吹く日」の「風が」は主格であり，「風は，空気の移動だ」の「風は」は題説構文の題目語で，「主題」（theme）ということもある。三者は構文レベルを異にする概念である。

①英語のように，述語動詞に強い影響を与えない。

②「甲が　乙に　丙を　紹介する。」の例文において，「甲が」は「乙に」「丙を」などと比較して，「紹介する」との関係が絶対的に優位にあるわけではない。一般化すると，主語とされているものは，他の補足部（連用修飾語・補語・補充成分）と本質的な差はない。

③「風があるらしい。」において，「風が」は「ある」とは関係するが，「らしい」の部分にまで力をおよぼさない。一般化すると，主語とされているものは，必ずしも述語の全体と関係するわけではない。

④「２に２を足すと４になる。」の文のように，主語が最初から予想されていないような文が日本語には多数存在する。

これらの事実から，三上　章は「主語廃止論」を提唱し，北原保雄は主語とされているものを，「主格補充成分」とし，「補充成分」の一つにしている。

一方「主格はほとんどあらゆる用言に係るが，他の格は狭く限られている。」「命令文で振り落とされる。」「受身は主格を軸とする変換である。」「敬語法で最上位に立つ。」「用言の形式化に最も強く抵抗する。」（三上　章『現代語法序説』）など，三上が挙げた「主格の相対的優位」のほかに，「基本語順で文頭に起こる。」「再帰代名詞の先行詞として働く」などの現象を付け加えて、「主語」を認めたほうが便利であるとする，柴谷方良など英文法的立場からの立論もある。　（小池清治）

参考文献　北原保雄『日本語文法の焦点』（教育出版，1984）；三上　章『現代語法序説』（くろしお出版，1972）；小池清治『日本語はどんな言語か』（筑摩書房，1994）